神力甲冑ラゴウセン

椎名千都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神力甲冑ラゴウセン

【Ｎコード】
Ｎ２９０３Ｖ

【作者名】
椎名千都

【あらすじ】
この話はフィクションだよ
ロボットとか能力とかでドンパチやるよ
ミサイルとかガトリングとか刀とかドリルとかパイルバンカーとかも出るよ

プロローグ

ここ数年で世界情勢は一変した。

発端は２０２０年、ある日本人学者が、今までの常識を根底から覆すような大発見をしたことによる。

彼は自ら発明した装置を使い、人の精神力からエネルギーを取り出すこと、つまり「超能力」を使うことに成功したのだ。彼はこの力を「神力（じんりき）」と名付け、それは「人類種の大いなる進化」として人々に大いに歓迎された。

神力はまさに神のごとき力だった。物体を動かすだけに留まらず、空中に浮かせることさえ可能。素質によっては火や水、風なども操ることができる。加えて神力の源は人の精神力。使用すれば疲労こそするものの、心身が健康であればすぐに回復する。まるでファンタジーやメルヘンのような力だ。

当然、神力にも欠点は存在する。一つは神力を使うための装置がかなり大がかりで高価な代物であるということ。もう一つは神力の強さは個人の資質に大きく依存する、ということである。

特に後者の問題は厄介であった。資質のあるものは、重さ５００キロの鉄塊すら宙に浮かせることができるが、そうでないものはせいぜい小石を動かす程度である。取り出せるエネルギー量に安定性がないということは大きな課題となった。

しかし、それらを差し引いても神力は非常に有用なエネルギーだ。世界中の学者たちが神力について研究を進めた。

その結果としてある発見がなされる。神力の資質を持つ者の割合は地域ごとに差があるということだ。具体的な位置としてアジア、特に日本、中国に神力が使える人が多く住んでいるという発見がされた。原因は定かではないが、アメリカに大柄な人が、アフリカ大陸に優れた運動能力を持つ人が多いように、文化や土地柄によるも

のだろうと推測されている。

資源は争いを生む。ある時は水、ある時は石油。人類は古来よりそれらを奪い合ってきた。当然、神力も例外ではない。もうじき、戦争が始まる。

プロローグ（後書き）

この小説は妄想です。実在の団体、人物、国家とは一切関係ありません。

第一話

「ジジィ！！　来たぞォ、ジジィ！！」
「やかましいッ！！　今何時だとおもっとるんじゃッ！！」
突然聞こえてきた怒鳴りあいのせいで目が覚めてしまった。前時代的なアナログ式の時計の針はちょうど深夜１２時をさしている。誰だこんな時間に騒ぐのは。
「乗せてやるから明日来いっていったのはそっちじゃねーか！！」
「だからと言って日付が変わると同時に来るやつがあるか、たわけ！！」
ボクはため息をつくと、ベッドから身を起こし喧嘩を鎮めるべく２人のもとへむかった。
「じーちゃん、大和、何でこんな時間に騒いでるの。近所迷惑でしょ」
騒いでいたのはボクの予想していたとおりの２人だった。１人は白髪で小太りの老人。ふつうの人に比べてかなり鼻が大きく、たくさんの吹き出物があり、お世辞にも整った顔立ちとは言い難い。ボクの祖父、水前寺猿彦（すいぜんじさるひこ）だ。
もう１人は身長１９０センチ近くはあろうかという大男。程よく引き締まった筋肉質な体、堀の深い顔に鋭い眼光、口元から覗く野性的な八重歯。とどめと言わんばかりに、短めに切られた髪は真っ赤に染められている。もはや裏社会の人にしか見えないが、彼はボクの友人、火威大和（ひおどしやまと）。決して借金の取立人とかではない。そっちのほうがしっくりくる風貌だけど。
そんな彼はボクのほうを見ると、まるで小学生のように目を輝かせて言った。
「おう、タケル！　ロボットに乗りにきたぜ！」

「そんなに焦らずともよかろうに……」
ボク達はじいちゃんについて地下への階段を下りていた。じいちゃんはいわゆる発明家というやつで、現役時代は主に「神力（じんりき）」について研究していたらしい。
神力とは人の精神力からエネルギーを取り出す、いわゆる超能力のことで、物を動かしたり、浮かしたり、燃やしたりできる。じいちゃんの専門は機械関係だったから、神力を取り出すための装置、神器（じんき）の開発に関わってたんだって。もしかしたら、じいちゃんかなりすごいのかも。
そんなこんなで実用化に至った神力は、社会のありようを大きく変えた。神力そのものはその性質とか、個人の資質の差とかで直接的にエネルギーとして使うことはしにくかったから、もっぱら巨大なものを神力で支えたり、機械の細かい動きを複雑な操作でなく、思考することで行う、みたいに補助的な役割で使われている。そのおかげで以前では実現不可能と思われていたいろんなものが生まれた。空を飛び、水上を走る自動車とか、考えるだけで操作できるコンピューターとか。
そんな神力の研究はこれから、という時にじいちゃんはなぜか引退。その理由が『戦闘用二足歩行ロボットを作りたかった』だって。いまだに平和憲法を維持してる国で巨大兵器なんか公に作れないもんね……。　そしてじいちゃんは地下でこっそりとロボットを作成。もちろんバレたら即逮捕。ボクも手伝ったから共犯なんだけど。そして完成したところで問題発生。パイロットがいない。最初に完成した機体は炎系の神力を使うんだけど、じいちゃんはほとんど神力を使えないし、ボクの神力は火を操るのに適していない。そこでボクの幼馴染の大和に白羽の矢が立った。彼は神力で炎を操ることができ、さらに恵まれた体格、身体能力とこの機体の特性にぴったりだった。
「まだかァジジィィィィ！！」
「大人しく待っとけ小童ァ！！」

・・・・・・なんでこんな仲悪いんだこの2人。じいちゃんは大和をパイロットにすることを最後まで渋った。大和が小さいころから喧嘩してたもんね……。2人ともロボットバカで、短気で、口が悪くて、共通点なら腐るほどあるのに。同族嫌悪ってやつかな。

「……」

「こいつが第一号じゃ。素晴らしいできじゃろ？」

「どうかな、大和。かっこいいでしょ」

燃え盛る炎のような赤を基調としたカラーリングに、鎧武者を思わせる力強い意匠。装甲はかなり分厚く、多少の衝撃では傷一つつきそうにない。背面には巨大なバーニアがついていて、ものすごい加速ができそうだ。全体のサイズに比べて相当大きめの拳は、この機体の特性を象徴するものであり、最大の武器でもある。

「……すげえ……けどよ」

「なに？」

「なんでこんなちっちぇんだ！？　スーパーロボットじゃねぇのか！！」

機体の全高はたったの3メートルほどしかなかった。

第二話

「こんなんスーパーロボットじゃねぇ……てっきり５０メートルぐらいあるもんだと……」

「さすがの大和でもそれは無理だってわかるでしょ、常識的に考えて」

チクショウ、それにしても俺の身長の３倍ぐらいの大きさは欲しかったぜ。あと今さりげなくバカ扱いしたよなタケル。

「フン、お前みたいなド低能でも動かせるように作ったらこうなったんじゃ。恨むなら九九も言えない自分の頭の悪さを恨むんじゃな」

好き勝手言いやがってこのクソジジィ、コノヤロウ。九九なら中学三年間で全部覚えたぜ。なめるな。

「ゴメン大和、ぶっちゃけ資金が足りなかったんだ……うち働いてる人いないし」

ウッ、そういやそうだった。コイツらジジィの年金しか収入ねえのか。

「じいちゃんの現役時代の蓄えも底を尽きて」

「・・・・・・」

「年金の支給額も昔の若者が払ってなかったせいで少なくて」

「・・・・・・」

「最近は週４回は一日一食にして頑張ったんだけどこれが限界……」

「すまんアキラ！　俺が悪かった！」

「あああああ頭上げて大和！！　いいんだってボク達も好きでやってたんだから！！」

食うものにすら困っていたとは……すまん……一日五回も飯食ってて……

「わしに謝罪はないのかクソガキ」

「寝言は寝て言えクソジジィ。サッサと起動の準備しやがれ」
「本当にお前は敬老精神のかけらも持っとらんな」
ケーローセーシン？　なんだそりゃ？　食えんのか？

「大和だいじょうぶ？　サイズ苦しくない？」
「ああ、問題ねェ。しかしこりゃロボットつーかパワードスーツだな。」
「確かにね。だからボク達はそれのこと『神力甲冑（じんりきかっちゅう）』って呼んでるよ」
神力甲冑……なるほど、乗り込む、よか着込むつったほうが確かにしっくりくるな。目線はあんまり変わらん。視界はフルフェイスマスクの内側に映し出されるようになってんのか。普段と変わらん視野の広さだな、こりゃ。外からの音も問題なく聞こえる。
「よし。大和、動かしてみるんじゃ」
「……どうやんだよ」
「早くせんかデクノボウ」
「だからどうやるん…」　ガコォ！！
うおおお！？！？
「ヒャァァァァァァァァァァァァァァアァッァァアアァァァ動いたァァッァァァァァァァァァッァァァァァァアァァァァァァァッァアァァァァッァァァァッーー！！！！！　スッゲェェエェッェェェェェェェェェエェェェエェェェェェェエェェーー！！！！」
「やかましィッ！！　ちっとは落ち着け！！」
「イィィィィィィィヤッホォォウゥゥゥゥゥゥ！！！！」
ガゴォン！！　ガイィィン！！

しばらくお待ちください。

「ハァッ……ハァッ……」
「結局３０分以上はしゃぎまわってたね……」
「だからコイツを乗せるのは嫌だったんじゃ」
イカン……俺としたことが……
「まあ大体わかったと思うけど、神力甲冑は装着者の動きに合わせて自動で動くよ。つまり、普段通りの動きをするだけで操縦できる。あと、運動能力…馬力とか瞬発力とかはかなり強化されるね」
それははっきりと体感できた。今なら高さ１０メートルくらいジャンプできそうだし、鉄骨の２本や３本ぐらいならまとめてへし折れそうだ。あと一つ気になんのは……
「ジジィ、背中とかのバーニアはどうやって使うんだ？」
「そこで神力を使わんでどうするんじゃヌケサクが」
いちいち癪に障るジジィだぜ。こうか……？
お、なんかいい感じじゃねえか。このまま…点火ッ！！
「ちょっ！！　大和、タイム！！」
バガァァァァァァァァァァァン！！！！！

・・・・・・あ・・・ありのまま今起こった事を話すぜ！『俺は地下室でバーニアに点火したと思ったらいつのまにか外に出ていた』
な・・・何を言ってるのかわからねーと思うが俺も何が起こったのかわからなかった・・・・・・
頭がどうにかなりそうだった・・・催眠術だとか超スピードだとかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえ
もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ・・・・・・

第三話

男は考えた。なぜ俺はこんなところにいるのか。
男は記憶をさかのぼる。つい数秒前まで彼は確かに地下室にいたのだ。男が上を見上げても天井はない。見えるのは星と月の光。おかしい。俺はただバーニア使っただけなのに。点火したとたんになんかすごい音がして、なんかすごい光った気がする。彼のミニマム脳みそでは考えてもその程度しかわからないので……そのうち彼は考えるのをやめた。

『何しとるんじゃァクソガキィイ！！』
大和の思考が停止した矢先に、しゃがれた声の怒声が浴びせかけられた。大和が声の方を見ると視界に鬼のような形相をした老人の顔が飛び込んできた。視界を映す画面に猿彦の顔が映っている。
「おー、なんかジジイの顔が映ってんぞ。ところで、なんで俺は外にいるんだ？」
『お前がワシの研究所の天井をぶち破ったからじゃァァ！！　考えなしに飛びおって！！』
「てめーが神力使えとかいうからじゃねーかバーロー」
『加減ちゅうもんがあるじゃろォがァ！！』
『大和もじいちゃんも喧嘩はあと！　早く戻って大和！　そんなもの人に見られたら大変なことになるよ！』
タケルが言うこともっともだ。ここは平和大国日本。当然、一般人が兵器を持つことなど認められていない。神力甲冑はデザインといい、いでたちといい、どう見ても作業用のロボットなどには見えない。おまけに本当に兵器として十分なスペックを持っている。見つかれば面倒なことになるのは避けられないだろう。下手をすればテロリスト扱いされ牢屋へ直行だ。
「んなこたァ、いくら俺でもわかってんだよ。ところで、なんか

サイレンの音がしやがるぞ。お、家が警察に囲まれてる。ヘリとか来てるぜ。ジジイなんかしたのか？」
さすが大和。状況をわかっていなかった。
「馬頭（ばとう）隊長、犯人のアジトを確認しました」
隊員がリーダーと思わしき人物に報告する。
「ああ、気を引き締めろよ。相手はテロリストだ。何をしてくるかわからん。どうせ底辺のクズ野郎だ。最初からぶっ殺すつもりでいくぞ」
「「「了解！！！」」」
彼らは全員プロテクターを全身にまとい、装甲の厚い、大型のバイクに乗っていた。白い車体が夜の闇に映える。武装二輪神力車（ぶそうにりんじんりきしゃ）『イダテン』。警察が持つ最大の戦力だ。神力によって従来のバイクをはるかにしのぐパフォーマンスを獲得した。通常ではありえないような動き――たとえば壁を走るようなこともできる。特殊兵装も搭載しており、その戦闘力は単騎で戦車にも匹敵する。イダテンに乗ることを許されたのは警察特殊部隊の中でもトップクラスのエリートのみ。その存在は多くの子供たちの憧れでもあった。
ふだん彼らは表舞台に出てくることはない。イダテンを使わなければならないほどの凶悪犯罪が起こることはごくまれだからだ。しかし今回は5台もの出動命令が出た。相手はどれほど大規模な組織なのか。馬頭と呼ばれた男はひそかにほくそ笑んだ。
上等じゃねえか。合法的にクズをつぶせる。クズはクズなりに楽しませてくれよ。
彼は悪に対しての正義の心でも、敵に対しての不安も持たず、ただ相手をいかに打ち負かして楽しむかだけを考えていた。
「隊長。この家の地下です。すでに機動隊も到着しています」
隊員の言葉を聞くや否や、馬頭は落胆の表情を浮かべた。
「こんなしょぼくれたアジトかよ……こりゃ期待できそうにねえなァ……」

その瞬間、少し離れたところで巨大な爆発。その場にいた全員が一瞬硬直し、爆心地に目を向けた。

煙が晴れて中から現れたのは、人型の赤いロボットだった。

第四話

突如地上に現れた鋼の巨人。身の丈は一丈一寸（約3．3メートル）、目方は二百六十と五貫（約一トン）ばかり。その脚は丸太のごとく太く、その拳は梵鐘（ぼんしょう）のごとく巨大なり。全身を覆う紅蓮の鎧、額に生えた二股の角。その風貌、さながら鬼のごとし。

水前寺宅を包囲していた警察隊、総勢157人。その誰もが予想していなかった事態の発生。巨人は困惑する部隊を尻目に、しばらくの間夜空を眺めていた。そのあとにようやく気付いたのか、視線を警察隊に移した。

「ハハハー、ヤマトー、ジョウダンハヤメテヨー」

タケルがひきつった笑顔で返答する。

『テロリストに告ぐ！！　そのロボットが不審な動きをすれば、抵抗とみなし即攻撃する！！　繰り返す――』

そのすぐ後に大和の発言が真実だということを裏付けるアナウンスが通信越しに聞こえてきた。タケルの顔がみるみるうちに青ざめてゆく。

「うわぁぁぁぁじいちゃーーーーーん！！！　どうしよぉぉおお！！！！」

半べそを掻きつつ猿彦に縋り付くタケル。しかし、半ばパニック状態のタケルとは反対に猿彦は不思議なほどの落ち着きを見せていた。それどころか顔に不敵な笑みさえ浮かべている。

『何したんだよジジイ、これヤバいんじゃねーか』

「ヤバいにきまっとろうが。お前のせいでこうなっとるんじゃぞ」

いまだに状況が呑み込めていない大和にあきれたように返す猿彦。

「ヤマトー、絶対に動かないでねー、できるだけおとなしくしてねーいい子だから」

『俺はガキじゃねーぞタケル！！』グィン！

『撃てー！！！』
銃撃と爆発の音が辺りにこだました。
「ヤマトォー！？」

「見かけ倒しかよ……つまんねぇなァ」
馬頭が不満げにつぶやく。鬼が出るか蛇が出るか、待ち構えていたら本当に鬼が出てきた。しかしその鬼はたかが銃で撃たれただけで爆発した。爆発した。ドカーンと。再び周りは煙に包まれる。まさかこれほどまでに弱いとは。全員が最初とは別の意味で呆気にとられる。
「……何してんだお前ら？」
爆煙の中から声がした。煙が晴れるとそこには無傷のロボットの姿が。馬頭は思った。これは見間違いだと。確かに爆発したじゃねぇか。二度目の射撃命令。再び無数の銃弾がロボットにあたり爆発する。
「いや、だから何してんだ？」
なんということでしょう、そこには無傷で立つロボットの姿が。馬頭は思いました。これは見間違いだと。彼はもう一度射撃命令を出しました。弾が当たりました。爆発しました。
「だからなにしてん」
そこにはやっぱり無傷で立つロボットの姿があるのです。射撃命令が出ました。爆発しました。
「なにして」
ロボットがいました。撃たれました。爆発しました。
「なに」
ロボット。ババババ。ドカーン。
「いい加減にしやがれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」
「なんで爆発してんのに効いてねぇんだコイツ！？」
キレる若者、驚く大人。
『フハハハハハァ！！　バカめバカめ、機銃なんぞ炸裂装甲（リアクティブ・アーマー）の前

ではバクチク同然じゃァ！！』
猿彦の勝ち誇った声が響く。炸裂装甲とはもともと戦車に使われていた技術だ。装甲の内部に爆薬を仕込んでおき、敵の砲弾が当たった時に炸裂させる。これによって致命的なダメージを回避するのだ。大和の乗る神力甲冑は、装甲の表面に大和の『火』の神力が流れるようになっている。衝撃が加わるとそれに反応して爆発し、弾き返すのだ。地下室の天井を突き破ったのも、この装甲が激突の衝撃によって爆発を起こしたからである。
「てめぇら全員殴り壊すッ！！」
「……ッ！　イダテン隊でるぞッ！！　まずはヤツを拘束するッ！！」
「「「了解ッ！！」」」
イダテン5台が大和を取り囲む。馬頭は内心興奮していた。イダテンの性能をフルに使っていいのだ。今までの任務ではデモンストレーションか、犯人を威嚇するぐらいしかしたことがない。実戦でイダテンの武装を使うことは初めてなのだ。彼はシミュレーションでは決して味わうことのできないスリルを楽しんでいた。
「食らえェッ！！」
各イダテンから2本のワイヤーが発射される。太さは5センチほどで先端には鉤がついている。
「うおっとォ、危ねぇ！」
大和は飛び上がって回避しようと試みた。しかし、イダテンの装備は神力を利用するものがほとんどである。当然先ほどのワイヤーもただのワイヤーではない。
「逃がさねぇぜぇ」
ワイヤーがまるで意思を持つかのように大和のあとを追いかけその手に、足に、首に絡みつく。このワイヤーはイダテンのライダーの思うとおりに動かすことができる。もともと壁や建築物を利用し、立体的な動きを可能にするための移動補助装備だが、このように拘束にも使える汎用性の高い武装だ。

「ぅぐッ！！」
飛び上がろうとした機体が地面に叩き付けられると同時に、爆発が起こった。
「……なるほど、衝撃を受けるたびに爆発するのか。全身爆弾みてぇな奴だな……さっきの銃撃も全部これで弾いてたわけだなァ……ならば」
ワイヤーが神力甲冑をさらにきつく締め上げる。
「グッ……クッソがァ……！」
「こうやってふんじばっちまえば終わりってこった。切ろうとしても無駄だぜ。神力で強化してあるからなァ」
両手、両足を開かないように縛られ、大和は芋虫のように地面に転がった。
「ぬ…ぐぐ…ジジ…イどうにか…なんの…かこれ」
『さっさと引きちぎらんか』
「でき…るかッ！！」
デキル
「……！？」

大和に電流走るッ！！　初戦闘にして大ピンチの大和が聞いた謎の声の正体とはッ！？　そして高校の歓迎会で「瞳を閉じて」を熱唱し、意図せず高校入学早々にネタキャラと化してしまったたN君の運命はいかにッ！？
次回もサービス、サービスゥ♪

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2903v/

神力甲冑ラゴウセン

2011年10月9日09時01分発行